

新分類群を見出す—誰もやっていない間違い探し—

ふじのくに地球環境ミュージアム 准教授

早川 宗志

連載第2回目となる本稿では、植物分類学におけるさく葉標本を用いた研究の醍醐味である新分類群に命名する面白さをご紹介します。

植物分類学とは、まだ名前のついていない植物に1つ1つ名前をつけていく研究分野である。世界には約27万種、日本には7000～8000種の植物が自生しているとされるが、実は、日本国内にもまだまだ名前のついていない植物が存在している。

世界的にみても日本は野生植物の研究が進んでいる地域の1つであり、優れた植物図鑑や植物写真集も多数出版されている。そのため、足元に生えている植物、目に留まった植物は普通、何かの図鑑に掲載されている。しかし、探し当てた植物の名前は本当に合っているのだろうか？ どこか図鑑や写真と異なる形をしていないだろうか？ 図鑑の解説と矛盾する点はないだろうか？ 「誰もやっていない間違い探し」のスタートである。私は植物図鑑を大いに愛読・活用する一方で、常に疑いながら読むことを習慣にしている。そして、この疑う作業を「誰もやっていない間違い探し」と密かに呼んでいる（早川2019）。間違いはそうそう簡単には見つからないかもしれない。けれども、間違いを見つけたときはチャンスである。それは、未知の植物や特性を見つけた瞬間かもしれないからだ。

私も植物分類学者としていくつかの植物に名前を付ける機会に恵まれた。例えば、里山に生育するラン科キンラン（図-1A）という植物。ラン科植物は6枚ある花びらのうち1枚が唇弁と呼ばれる特殊化した形態をしている。しかし、唇弁が通常の花弁に先祖返りしたことで、ランなのにユリの様な花をしていたのだ（図-1B）。このような変異体は、ペロリア化（整齐変態現象）と呼ばれる。このランにはまだ名前が付けられていなかった。筑波山で見つけたことから、新品種ツクバキンラン（*Cephalanthera falcata* f. *conformis*, 図-2A）として名前を付けた。国立科学博物館 植物研究部（TNS）とミュージアムパーク茨城県自然博物館（INM）には複数のツクバキンラン標本が所蔵されており、筑波山を中心として茨城県内に分布する一方、茨城県外の標本は見いだせなかった（その後の調査によって、ツクバキンランは関東に点在することがわかってきている）。この経験から、各地の収蔵庫において注意深く標本を観察してみると、同様の変異体はラン科キンラン属から複数見出すことができ、これらに和名および学名をつけるという機会を得た（図-2；Hayakawa *et al.* 2014; 2016; 2020; Suetsugu & Hayakawa 2019）。

皆さんも、この「誰もやっていない間違い探し」に参加されてみてはいかがだろうか？ ツクバキンランの場合、筑波スカイラインをドライブしていたときに偶然見つけたもので

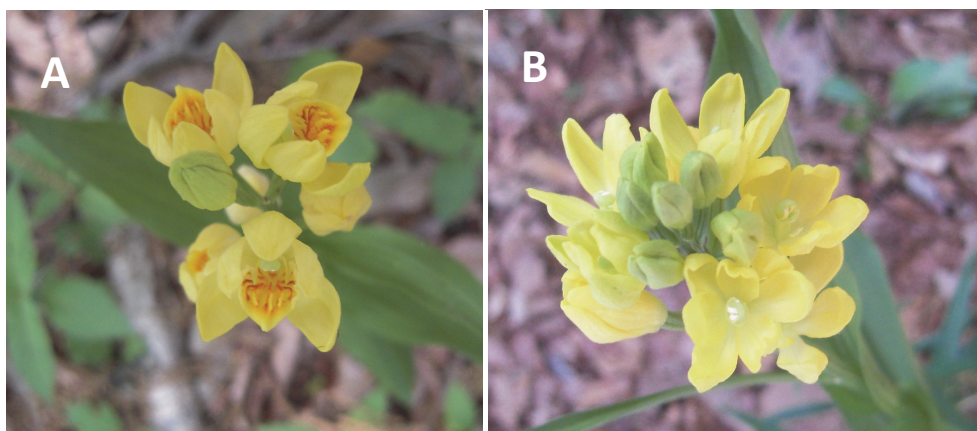


図-1 キンランとツクバキンランの花序 A：キンラン，B：ツクバキンラン

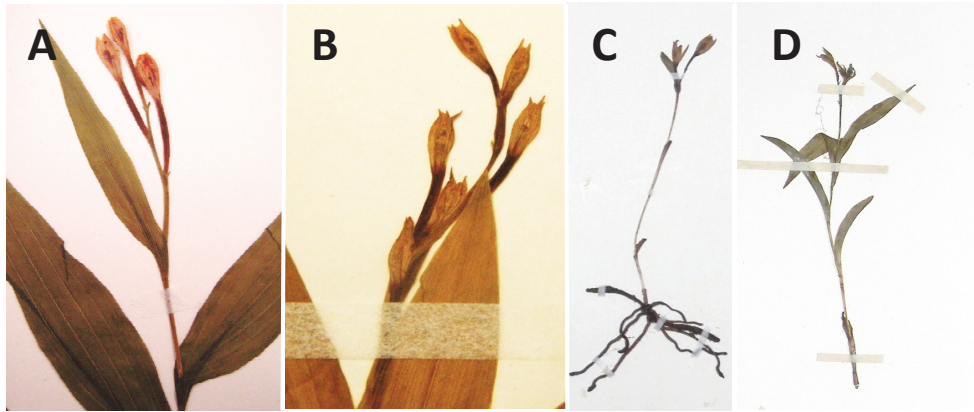


図-2 ラン科キンラン属のペロリア変異体の標本
A: ツクバキンラン, B: ヤビツギンラン, C: オンタケユウシュンラン, D: ホシガタクゲヌマラン

ある。「誰もやっていない間違い探し」はいつでも気軽に参加可能である上に、間違いに気が付いた瞬間に世界で初めて正解を見出した人になれるというご褒美が待っている。そのため、病みつきになる間違い探しであることを保証する。

そしてまた、この小さな間違い探しから植物の多様性を紐解く次の仕事もスタートする。唇弁が通常の花弁に置き換わることにどんな生態学的な意味があるのか？ どの遺伝子が壊れると唇弁が形成されなくなるのか？ 訪花昆虫のプラットフォームたる唇弁が形成されなくなると訪花昆虫はやって来られるのだろうか？ 訪花昆虫が来ないならどうやって繁殖しているのだろうか？ 疑問は次々と湧いてくる。「誰もやっていない間違い探し」に終わりではなく、また次の問題の正解探しにとりかかることとなる。

雑草学者の中には、上記のような経験をお持ちの方も多いのではないだろうか。“何か雰囲気が違う”と思っていた植物が新しい外来種であったり、秋開花のはずが“初夏に咲く集団”があったり、除草剤で何故か“枯れない雑草種”があったり、と。これらは研究の着手が、和名の新称か、新規の生態や除草剤抵抗性の報告かの違いなだけであろう。つまり、植物分類学者も雑草学者も「誰もやっていない間違い探し」に日々、取り組んでいるのではないかと思っている。

なお、ツクバキンランでは記載論文の投稿中、茨城大学の鈴木昌友先生のグループによって40年以上前にその存在が認知されていたこと(鈴木・野口1970)に気が付き、引用することができた。同様に、ギンランのペロリア品種であるヤビツギンラン(*C. erecta* f. *pelorica*, 図-2B)も神奈川県立生命の星・地球博物館(KPM)における標本調査中に柳川氏によって和名新称がなされていること(柳川1982)に気が付き、その和名を採用することとした。これら2品種を記載後、インターネットで検索すると多数の情報がヒットす

るようになった。記載前から両分類群は現地で生育しており標本も多数採集されていたにもかかわらず、である。これは、未記載の分類群から正式記載(名前が付く)ことによって人の認知がなされるということを端的に表している事例といえるだろう。他方、ユウシュンランのペロリア品種であるオンタケユウシュンラン(*C. subaphylla* f. *conformis*, 図-2C)は記載時に見出した標本2点しか現状でも知られておらず、まだ誰も生植物の写真を撮影していない植物である。このように分布や個体数が少ないと考えられる分類群では、標本が採集されていることによって初めてその存在自体が明らかになる事例もある。

標本調査を許可いただいた各ハーバリウムスタッフに感謝する。

参考文献

- 早川宗志 2019. 誰もやっていない間違い探し—未知の生き物を見つける楽しみ—. グリーンパワー (488), 15.
- Hayakawa, H. et al. 2014. *Cephalanthera falcata* f. *conformis* (Orchidaceae) forma nov.: a new peloric orchid from Ibaraki Prefecture, Japan. Acta Phytotax. Geobot. 65: 127–139.
- Hayakawa, H. et al. 2016. Morphological variation in the species of *Cephalanthera* (Orchidaceae) in Japan. Acta Phytotax. Geobot. 67, 199–203.
- Hayakawa, H. et al. 2020. A new peloric form of *Cephalanthera erecta* (Orchidaceae) from Japan. Acta Phytotax. Geobot. 71, 163–170.
- Suetsugu, K. & H. Hayakawa 2019. *Cephalanthera longifolia* f. *conformis*, a new peloric orchid from Japan and Bhutan. Acta Phytotax. Geobot. 70, 135–138.
- 鈴木昌友・野口達也 1970. 唇弁が花弁化したキンラン. フロラ茨城 (48), 1–2.
- 柳川定春 1982. ギンランの一変異個体について. 神奈川自然誌資料 3, 15–16.